



会報

第24号

平成6年2月

社団 法人 北海道美術館協力会

札幌市中央区北1条西17丁目 電話011-644-4025



北海道立近代美術館蔵

新収蔵作品 マルク・シャガール「パリの空に花」

1967年 油彩・キャンバス 148.0×140.0cm

ロシアのヴィテブスクにユダヤ人として生まれたシャガールがパリに出たのは1910年23才のときである。この地で多くの芸術家と交わり、前衛的な芸術思潮を吸収しながら、やがて持ち前の豊かな色彩感覚と自由で幻想的な画風によってエコール・ド・パリを代表する作家として頭角を表すようになる。

「パリの空に花」はシャガールの後期を代表する

作品。エッフェル塔とセーヌ河を眼下におさめたパリの眺望が幻想的な青い色調で描かれている。画面を斜めに横切る色鮮やかな花束と婚礼衣裳に身を包んだ一組のカップル。この作品はシャガールがこよなく愛したパリの街と、終生のテーマであった「愛」に対する賛歌であるともいえるだろう。

いま、会員の美術展観覧は

会員のみなさんの強い要望もあり、会員証利用により美術展観覧ができるのは、昨年6月から「札幌芸術の森」も加え、現在道立5館・その他3館となりました。

道立は札幌の近代美術館・三岸好太郎美術館と旭川美術館・函館美術館・帯広美術館で、その他は札幌彫刻美術館・芸術の森美術館・同野外美術館です。

ご承知のように当会の会員証を利用した場合は、会員本人以外に同伴者1名まで観覧できることにしておりますが、これはひろく美術文化の振興発展に寄与する当会目的の一環として一般道民の方々にもサービスをすることです。

これは、多くの方々に美術に親しんでもらうと同時に、当会の趣旨もご理解いただき、その輪を拡げてますます充実した美術館協力を進めてまいりうということにはなりません。

今回は、会員証の利用状況に焦点を当ててみることにします。

●会員証利用による美術展観覧

会員証利用による観覧料金は、観覧者数に応じ会から

当該美術館に支払われますので、その支払額により実績を把握することができます。

その支払額は、およそ会費収入総額の34%から43%程度の間で推移してきています。財政的に見ると、この支払比率は決して少ないものではありません。しかし、一方ではもっと観覧者が増加することも期待しているのです。

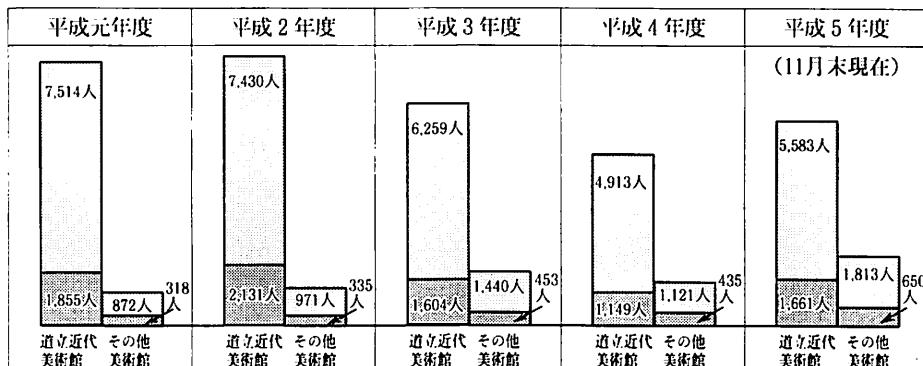
会員は年々僅かずつですが増えています。しかし、会員証利用による美術展観覧は必ずしもこれに比例しているとは限りません。これはその年度のイベントに左右されるということなのでしょうか。

●同伴者観覧の状況

家族での同伴観覧、親しい友達との同伴観覧、それらのなかから少しずつでも美術に対する関心の輪が拡がってくれればという願いが込められているのが会員証による同伴者観覧なのです。

統計的に見ると、同伴者を伴って観覧するというのは必ずしも多いとはいえないよう思います。

5年間の状況を見てみましょう。



註) 上記の「その他美術館」は、道立旭川・函館・帯広・三岸好太郎美術館および札幌彫刻美術館・芸術の森美術館の観覧者数を示しており、また、観覧者数については、平成元年の場合の例で、7,514人は会員証利用観覧者総数、1,855人はその内の同伴者数を示しています。

●人気のあった美術展

近代美術館の場合を見てみます。観覧者がすば抜けて多いというのは10万人を超えた場合のことのようですが、そのようなケースは稀ということができそうです。観覧者が多いことばかりで美術展を評価することはできないと思いますが、観覧者がいつもまばらなのは寂しい気がします。ここ5年間、その年で一番観覧者が多かった展覧会をご紹介します。

美術館では、みなさんが気軽に来館され美術に親しんでもらえるよう努力を重ねております。本年は1月11日から「特別展示」としてマルク・シャガール「パリーの空に花」が1階ホールに展示されています。

近代美術館には4月10日まで展示されております。そ

観覧者総数 145,053人	74,706人	67,012人	66,076人	104,626人
会員 145,053人	21,557人	16,152人	17,122人	14,662人
同伴者 80,500人	554人	582人	581人	859人
半成元年度 ポスト印象派	19世紀ロシア絵画展	スペイン美術展	フランス美術展	東山魁夷展

の後は他の道立美術館での巡回展示も予定されているようです。

会員のみなさんも、どうぞご同伴でおいでください。と同時に同伴者の方も美術振興の輪に加わり、会員としてご加入いただくことについてもよろしくご協力お願いいたします。

大きく拡がろうとしている 協力会のボランティア活動

当会では、ボランティア活動領域の拡大充実を目指し
昨年から委員会を設置して検討を重ねてきましたが、大
筋の意見集約が出来上がりました。

その概要は、現在ボランティアが活動している売店・解説・資料の3部門に新しく事業・広報・研修・特別活動の4部門が加わることになるというものです。特別活

動部門は主として館外活動に重点がおかれます。

このボランティアの確保ですが、来年度からはボランティア養成のための美術講座枠を従来の50人から200人に拡大し、女性に限らないこととすることにより解決していくかと考えております。

新入会員の紹介（平成5年7月～12月）

ご入会ありがとうございました。

美術館ニュース.....

北海道立近代美術館

平成6年度の道立近代美術館の事業を紹介します。昨年末に、シャガールの作品を加えて一層の充実を見せてきた当館のコレクション。これをさまざまなテーマで楽しんでいただく『これくしょん・ぎゃらりい』も多彩な内容の展覧会を予定しています。『歴史と風俗と人間と——日本画に見る』、『スタジオグラスの系譜』、『パリ・ナンシーフランス——二都物語』、『北風景追憶——絵巻から絵葉書まで』、『ロマンティック・イマジネーション』など、新収蔵の作品もおりませて、4期に分けて展覧します。また、常設展示室では『極北のイヌイットアート』展（7月12日～10月2日）も開かれ、これまであまり紹介されることのなかった極北に住むイヌイットの芸術を紹介します。

特別展の方は『砂澤ビッキ展』でスタートします（4月16日～5月15日）。アイヌの彫刻家で、生命力あふれるダイナミックな造形を追求した砂澤ビッキの芸術の全貌を明らかにします。続く『世界現代ガラス展 World Glass Now '94』（5月22日～7月3日）は、現代ガラスの現況を紹介するシリーズの第5回展。これまでトレンナーレ形式で開催され、世界有数のガラス造形のコンクールとして内外の評価を得ていましたが、今回が最終回。それにふさわしく、この第5回展はコンクール部門に絞った内容とし、ノミネートされた若手作家約100人、約100点の競演がくりひろげられます。

夏には沖縄染色文化の粹を紹介する『琉球紅型の世界』展（7月12～8月14日）が開かれます。紅型といえば華麗な色彩と多彩な文様をもつ格調高い染色技術として知られていますが、本展では王朝の伝統を継ぐ古琉球紅型に、戦後になって再興された再興紅型を含めて、紅型の魅力を総合的に紹介します。続いて開かれる『変貌する20世紀絵画』展（8月20日～10月2日）は、オランダのファン・アベ美術館のコレクションによって、ピカソから今日に至る欧米の絵画の展開をたどります。ピカソのほか、シャガール、ミロ、カンディン斯基、モンドリアン、エルンストら20世紀の巨匠たちの名作が顔をそろえます。

秋は北海道の美術状況を新たな角度で切る『北海道・今日の美術』展（10月23日～11月27日）、冬には恒例の子供を対象にした『アミューズランド'95』（12月17日～2月5日）、そしてエコール・ド・パリの女流作家として、日本でつとに有名なマリー・ローランサンの世界を一堂に紹介する『マリー・ローランサン』展（2月12日～3月19日）が開催されます。

このほか、夏休みには好評のミュージアムスクールを、また10月には『札幌アヴァンギャルドの潮流』展（貸館）といった展覧会も開催予定です。

北海道立旭川美術館

平成6年度展覧会予定について

道立旭川美術館では平成6年度の事業として、国内外の近現代美術を幅広く紹介していく予定です。以下にその予定を簡単に紹介しましょう。

福井爽人展（仮称） 5/14(土)～6/12(日)

福井爽人（1937～）は旭川に生まれ、小樽に育った日本画家です。平山郁夫に師事し、現在日本美術院の同人として、画境を深めつつあります。その作風は詩的かつ叙情性豊かなもので、戦後世代を代表する作家の一人といえるでしょう。日本画と素描計約80点によって初期から現在までの歩みを回顧します。

デイヴィッド・ナッシュ展（仮称） 6/18(土)～7/17(日)

デイヴィッド・ナッシュ（1945～）は、イギリスの作家で、「木」そのものの形や性質を生かした独特の彫刻作品で世界的に高い評価を受けている作家です。彼は世界各地でそれぞれの環境を生かした作品の制作プロジェクトを行っていますが、この展覧会では昨年から今年にかけて音威子府で制作した作品を約30点紹介します。

舟越保武の世界展 7/22(金)～8/14(日)

舟越保武（1912～）は、本郷新、柳原義達、佐藤忠良らと並ぶ日本の具象彫刻を代表する彫刻家の一人で、敬けんなカソリック信仰と詩的な感性に裏付けられた純度の高い作品の数々を生み出しています。本展では、石彫、ブロンズ、素描など137点の作品によってその芸術の軌跡をたどります。

ミルウォーキー美術館所蔵

二十世紀美術の巨匠展（仮称） 9/10(土)～10/16(日)

ヨーロッパおよびアメリカの近現代美術のすぐれたコレクションを所蔵しているミルウォーキー美術館の作品により、ピカソ、ユトリロ、ムーア、ベン・シャーン、ウォーホルなど、20世紀美術の巨匠たちの絵画、彫刻など約60点を紹介します。

鳥山明の世界 10/22(土)～11/27(日)

現代の漫画文化を象徴する代表的作家鳥山明（1955～）は「Dr.スランプ」「DRAGON BALL」などの人気作品を発表し、独自のスタイルをうみだしています。本展では、原画、映像、キャラクター商品、海外出版物などを一堂に集め、鳥山明の全貌を探るとともに、もはやサブカルチャーとはいえないほど社会に大きな影響力をを持つ漫画の現代における位置を考えようとするものです。

以上、5つの展覧会を紹介しましたが、この他にも所蔵品を中心にした企画や四回目の「北海道・今日の美術展」、常設展などで多彩な作品を紹介していきますのでどうぞご期待下さい。

.....美術館ニュース

北海道立函館美術館

平成6年度前半の展覧会を紹介します。

来年度は、ミロの生誕100年を記念した「ミロ展—地中海に咲いた版画芸術」(4月9日～5月22日)から始まります。ピカソと並んで20世紀スペインを代表するミロは、その長い作家活動の間に、膨大な数の版画を制作しています。今回は、初期作品から晩年作まで、特別出品の彫刻等を交えて約100点を出品します。ミロ特有のファンタジーに満ちた記号的世界が、私達の目を楽しませてくれるでしょう。

つづいて5月28日から7月3日までは、「池谷寅一展」を開催します。池谷は函館をこよなく愛し、一貫して函館やその近郊の風景を、爽やかな筆致のうちに描き残しました。地元の赤光社、そして道展、全道展の創立に関わるなど、北海道の画壇に大きな足跡を記した池谷の画業を紹介する初めての本格的な展覧会となります。

「映画ポスター・アート展—ハリウッド映画の100年」(7月9日～8月21日)では、今世紀初頭から最近まで、評判の高かった、あるいは芸術性の高いハリウッド映画のポスターを紹介します。シェレやロートレック以来、これまで数多くの芸術的ポスターが制作されていますが、今回の多様なポスター群も、ノスタルジーとともに、幅広い芸術の世界を見せてくれるでしょう。

つづく「寺崎広業展—咲きほころ明治の雅趣(仮)」(8月27日～9月25日)は、本年度唯一の日本画の展覧会です。函館にもゆかりのある広業は、大観や觀山とともに日本美術院の創立に力をつくし、東京芸術大学教授、文展審査員をつとめるなど、日本画壇の重鎮として活躍しました。狩野派、四条派、南画など各派の技法を自分のものとした広業の作品には、明治という時代の息吹きが華やかさとともに漂い、そうした作品が、今回は本道はじめでまとまったかたちで鑑賞できる貴重な機会となることでしょう。

また、常設展示室では、4月9日から6月7日まで昨年度当館で収集した作品を紹介する「新収蔵品展」を開催します。収集方針のひとつである文字記号に関する作品を中心に、前田政雄、天間正五郎など道南地方の版画をリードしたふたりの作品をご覧いただきます。6月8日から7月3日までは、道立近代美術館で購入したシャガールの「パリの空に花」をその他のエコール・ド・パリの名品とともに展示します。鷗亭記念室の「金子鷗亭—現代詩歌奏」展(第1期/4月9日～7月3日)とともににお楽しみください。



池谷寅一「函館の冬晴」

北海道立帯広美術館



キルヒナ「脱穀する人」1992年

当館で開催する平成6年度上半期の展覧会の概要をお知らせします。

主展示室で行う特別企画展は、4月29日から5月29日まで、江戸末期に活躍し、ヨーロッパ近代美術にも大きな影響を与え、世界的にも高く評価されている絵師葛飾北斎とその弟子たちの版画、版本、肉筆画などを津和野、葛飾北斎美術館の所蔵品により紹介します。6月4日から7月10日までは、『麗しの女性たち展』を行います。19世紀末から今世紀初頭にかけて女性の社会進出が顕著になり、美術においても肖像画や風俗画などにおいて、新たな表現が展開しました。ルノワール、ティソ、サージェントなどによって描かれた華麗な女性像の名作約90点を紹介します。7月16日から8月14日までは、『ドイツ表現主義の版画展』を開催します。表現主義は、今世紀初頭ドイツを中心に美術のみならず文学、音楽などの幅広い分野にわたって展開した芸術運動です。版画においてもカンディンスキー、クレー、ノルデ、キルヒナーなど的一群の作家たちが斬新な表現を展開しました。本展ではこれらの作家たちの作品によりドイツ表現主義の版画芸術を概観します。つづいて、8月20日から9月18日までは、『琉球紅型の世界』展を開催します。沖縄の代表的染織「紅型」は、琉球王国時代に育まれ、江戸時代中頃、高度に洗練され、鮮やかな色彩と多彩な文様をもつ格調高い染織品が多く作られました。これらの古琉球紅型とさらに戦後再興された技法によって制作された作品によって紅型の世界を総合的に紹介します。

コレクション・ギャラリーでは、4月14日から5月8日まで北海道立近代美術館で新たに収藏したシャガール作品を中心にエコール・ド・パリの作家たちの作品を紹介します。5月10日から7月10日までは、バルビゾン派を代表する作家たちの油彩、水彩、版画作品を紹介します。つづく7月16日からは、釧路在住の現代彫刻中江紀洋の近年の代表的な作品を紹介する『中江紀洋展』を行います。この展覧会には作家と市民による共同制作『アート・ウォッチング94』で制作した作品もあわせて展示します。

美術館ニュース.....

北海道立三岸好太郎美術館

三岸好太郎美術館では、現在「憂愁の道化たち」と題して所蔵品展を開催中です。1929年から1932年にかけ三岸が多く制作した、道化を主題とした作品は、彼の変転する画業のなかでもひとつの重要な位置を占めています。この道化のシリーズを通じて三岸は表現技法にも新境地を開いていきますが、そこに描かれた道化の姿はどこかもの悲しいような哀感をにじませてもいます。独特の憂愁に満ちた三岸の道化の世界をご覧ください。

さて、三岸好太郎（1903-1934）の没後60年にあたる今年の特別展を紹介します。

「黄色い鋼鉄船—三岸好太郎と独立展創立の画家たち（仮称）」（7月14日～8月28日）では、昭和初期、日本の洋画界に大きな影響を与えた独立美術協会の創立会員たちの主要作品を展覧します。1930年11月、既成の画壇にあきたらぬ気鋭の画家たちが、新しい美術団体「独立美術協会」を結成しました。創立の宣言に名を連ねたのは、伊藤廉、川口軌外、児島善三郎、小島善太郎、里見勝蔵、清水登之、鈴木亜夫、鈴木保徳、高畠達四郎、中山巍、林重義、林武そして三岸好太郎の13名。さらに滯仏中の福沢一郎を加えて、彼らは翌1931年1月に第1回の展覧会を開催します。それぞれに志向を異にしながらも、創立会員たちは新時代の芸術創造の情熱をもって意欲的な創作活動を行っていきます。

この創立に際して、最年少27才の委員として参加した三岸は、当時の美術雑誌に『黄色い鋼鉄船』と題した詩を寄せ、会の出発を船出に見立てて、たゆまぬ前進への意気込みをうたっています。彼は精銳な仲間たちに伍しながら力作・意欲作を発表し、さらなる飛躍へと向かっていきます。本展は、独立展創立の画家たちの強烈な個性のぶつかりあうなかで、三岸がいかに自己の画業を展開させていったかをたどりうとするものです。



三岸好太郎《道化役者》1932年
第2回独立展出品

た、三岸の画業の展開をさまざまな側面からたどる所蔵品展もテーマを設けて開催します。今後とも、個人作家美術館として、三岸好太郎の芸術と美術館に親しんでもらえる企画を考え、調査研究を深めていきたいと思っています。

財団法人札幌彫刻美術館

札幌出身の彫刻家『本郷新』を記念するこの美術館は、かつて本郷新のアトリエであった記念館と道を挟んで建てられた白亜の美術本館の2つの建物とその庭で構成され、宮の森の閑静な住宅街の中にあります。

収蔵されている作品には420点に及ぶ彫刻作品に加え、680点を超える油彩・デッサン・リトグラフ等があり、本美術館は開館以来14年目を迎える本年まで、毎年2年度の作品の展示替えを行い「本郷新の彫刻の世界」をベースとして収蔵品展を順次公開してきております。

馬と少年、鳥を抱く女、母子像、手の造形、頭髪、無辜の民、テラコッタ等々の作品群をそのクロッキーやデッサン、素描等と共に一連の制作過程を関連づけて理解できるような展示等も試みております。

この他、氏が制作に用いたさまざまな道具や画材等の1部も展示しております。更に、野外彫刻を目指した氏の作品の幾つかは、本館・記念館のそれぞれの前庭に置いていますが、特に彼の代表作である「わだつみの声」は、本館通路前で来観者を迎えてくれています。

このような日常行われる収蔵品展示の他、1年置きに行われる2つの事業があり、毎年交互にこの事業が開催されます。1つは、本年度に開催され第6回を迎えた『本郷新賞』受賞作品の選考と受賞を記念する展覧会の開催です。そしてもう一つは、来年度第7回を迎える『北の彫刻展』で、8月上旬から10月までの約2か月間を期日として、本館で開催されます。

この『北の彫刻展』は、北海道を活動の拠点として活躍している彫刻作家20数名によって、その時点で制作されている作品を展示して頂き、それぞれの作家の現時点での創作への姿勢を公開して頂く展覧会としております。具象・抽象、素材としての質、制作の方法なども問わない純粋な創造性・芸術性を吐露して頂くための、本道彫刻家の公開の広場として機能できればと考えております。

美術館活動としては、これら展覧会活動のほか、札幌市内や近郊、道の内外のそれぞれの地域に設置してある彫刻を訪ね、鑑賞し学び合う小旅行「彫刻巡り」も恒例となっております。これには、彫刻美術館の支援団体である「彫刻美術館友の会」の方々のアイデアやお力添えも頂き、関心を持つ方々を広げ、交流の輪を大きくしていくことを目指しております。

小さな美術館の持つ長所を生かして、ギターやチェロなどのソロ演奏会や、小人数のアンサンブルなどの場としても本美術館を提供してきており、来年度も『第22回美術館コンサート』の開催を予定しております。



.....美術館ニュース

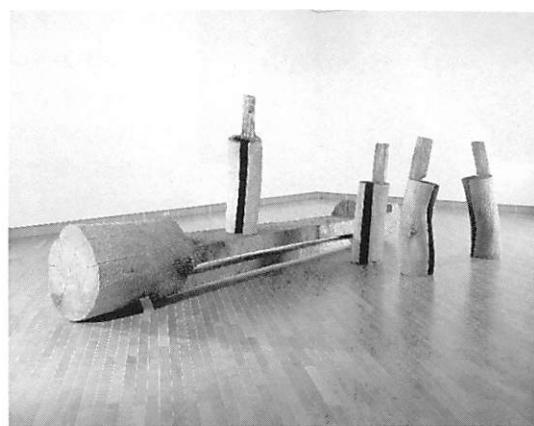
芸術の森美術館

4月10日(日)まで、芸術の森美術館収蔵品による「彫りだされた木^と木～北に生きた彫刻家たち」展を開催しています。本展では、北海道に生まれ育ち、その風土の影響を受けながら制作を続けた本田明二、砂澤ピッキ、米坂ヒデノリ、富谷道信の木彫作品25点を展示しています。

彼らは、木という素材に対して、身近にあるという以上の特別な思いで取り組んでいます。木は石や粘土といった他の素材と違い、作品となる前には自然のなかで長い間生命を営み続けてきました。そして、制作途中や作品となった後も、呼吸しながら変化しています。また、古くから日本人は樹木を神聖化し、そのなかに靈的な存在を見てきました。優れた仏師は、木から仏像をつくりだすのではなく、もともとそこに宿っている仏を取り出すのだと言います。今回展示する作家たちもまた、生きている木の声を聞き、それと対話するかのように作品を生み出しています。また、北海道に暮らす人々は、開拓以前から自然と深く関わりを持ってきましたが、これらの作品には、自然への畏敬や祈り、厳しい自然のなかで懸命に生きてきた祖先への鎮魂の思いも見ることができます。

す。本展は、野性味あふれ、土俗的で神秘的な雰囲気を漂わせる彼らの作品によって、北海道の彫刻のひとつの特徴を紹介するものです。

なお、当館では、現代彫刻を展示する野外美術館と呼応する形で、近・現代の彫刻の流れを継ぐことができるよう、国内外の優れた作品を系統的に収集し、さらに札幌にゆかりの深い画家の作品を収集しています。今回は、当館が開館以後新たに収藏した彫刻8点、絵画31点をあわせて紹介しています。



砂澤ピッキ《風に聴く》1987年
木(赤エゾ松、カツラ) 214.0×605.0×68.0cm

新年度の国内美術研修旅行は四国（高松・徳島）

例年、春に行っています国内美術研修旅行は平成6年度で12回目を数えることになります。今まで

昭和59年	富士箱根美術の旅	富士箱根方面
60年	飛鳥・斑鳩の里	斑鳩・正倉院・飛鳥方面
61年	梅の九州美術の旅	福岡・長崎・熊本方面
62年	みちのくの秋	仙台・盛岡・秋田方面
63年	東京ハイライト	横浜・東京方面
平成元年	瀬戸内海美術の旅	広島・岡山・松山方面
2年	古都京都・花博美術の旅	(中止)
2年	信州の里美術の旅	小諸・長野・松本・甲府方面
3年	北陸路美術の旅	福井・金沢・富山・新潟方面

4年	六甲山麓美術の旅	神戸・六甲山方面
5年	近江路美術の旅	愛知・滋賀・岐阜方面

を実施してきましたが、その内容は参加した方の旅行記等で会報によりお知らせしてきたところです。

平成6年度の国内美術研修旅行は四国の高松市立美術館（特別展・アールデコの世界予定）・徳島県立美術館（特別展・豊光<あいみつ>展予定）・丸亀市猪熊弦一郎現代美術館等を美術鑑賞の中心とし、その他見学場所としては徳島県文化会館・藍染工芸館・屋島宝物館・金刀比羅宮・同博物館・瀬戸大橋等を予定しております、郷土色豊かな食事も吟味して皆さんの期待にそよう企画しました。期日は5月17（火）から5月20日（金）を予定しております。

近くチラシにより具体的な案内があると思いますが、多くのご参加をお待ちしております。

会員の動き.....

美術研修旅行記

心の糧・美の探訪

吉田倫子



今回私は先発A班で、9月14日～23日迄マドリットとロンドンの各都市を起点に観光と美術館めぐり、ホテルは2ヶ所で楽でしたが、乗物で

脚で、視聴・思考フル回転というところです。天候もまあまあでした。

マドリットは異教徒の争いの果て定着発展した古い歴史の背景が、莊厳な面と氣の抜けない土くささを匂わせます。スペイン広場のドン・キホーテの像は愉快です。

美術館はプラドを筆頭に膨大な数の絵に接し、時代を越え画き手の想いが伝わってきます。学芸員の五十嵐さんの説得力ある解説で宗教画の絵解きや、西洋画の光・色・構図の妙・立体感・上昇感と興味は盡きません。

プラドはスペイン絵画の総結集でゴヤ・ベラスケスの王族・戦い・風俗の絵や飽きないボス・ルーベンス・ティエッティアーノと巨匠が続きムリリヨのい優しい画面に目が止まりました。これらが王室コレクションの偉業と驚嘆ですが、エル・エスコリアル宮殿でも同様歴代の王室墓所に圧倒されました。一方でソローリヤ美術館は画家の住居跡、ホットした温もりがあり、ティツセン美術館もベージュの壁が沢山の絵を疲れず観せてくれました。

王妃ソフィア美術センターではピカソの「ゲルニカ」が迫力をもって反戦の意志と人類の悲しみをモノクロで叫んでいます。若い頃の肖像画は印象的でした。

トレドの旧市街を高台から眺め、悠久の流れタホ川と共に永遠なれ!!と願います。狭い通路の石畳を踏みしめ大聖堂・食市場と生活の感触を得、グレコの絵も存分に観ました。夜は本場フラメンコの雰囲気に浸ります。

ロンドンに移動し、これ正しく大英帝国の顔です。テムズ川べりに主な建造物を望み市内一巡して重々しい歴史と伝統が生きる中、新旧共存を感じます。主要道路はやがて整然と美しいレンガ住宅を抱え、先は緑の草喰む

羊の点在する田園です。牧歌的なシェークスピア生誕地アポンエイボンで花と愛に充ちた若き日の彼を草葦屋根の家で偲びました。同日オックスフォードの古めかしい尖塔の建物が自然に融合した学園都市で学ぶ若人を羨み、晩にはミュージカル「レ・ミゼラブル」の観劇でした。

ホテル間近、リーゼントパークを散策した朝の爽やかさ!!広大な園内に樹木を誇る大木、花と緑、水と鳥、リスが戯れ都会では自然が心を癒す実感を味わいました。

大英博物館をはじめ著名な美術館を廻り大航海国の行跡大なりの感じです。格式高い王立美術館でピサロの特別展を観て、ティートのターナーの充実したコレクションはさすがで作家の筆致・変遷が解ります。こゝでミレーの幻想的な「オフィリア」にも逢いました。

端然としたナショナルギャラリーは内部も壁色や、天井も重厚、イタリアルネサンスの印象派の作品が見れます。ビクトリア・アルバート美術館も凝った入口、多大な工芸品、衣裳もあり楽しく足を運びました。

最終日バッキンガム宮殿の衛兵交替を見て観光に色を添えました。今回一行23名は小杉團長に「ファミリー」と稱され、和やかで動き易く、余裕と空間に恵まれました。棟副團長がいみじくも「美の探訪は人間探訪では」といわれ私も同感!偉大な文化遺産を遺した人間の歴史の中で小さな自分が何であくせくするのかと心を広げます。皆様に支えられよい旅となり感謝しております。



会員の動き

美術研修旅行記

マドリッド・ロンドン「美の探訪」は 感動とロマンに満ちて

亀廻井偉慧子



光の点描が漆黒の空と陸の境のない世界に見え始め、やがてその一つ一つが膨らんで、下降始めた機体の窓からバラハス空港とわかる輪郭を描きだした時、恰もそれは未知なる国へ誘う幻影のようにも映りました。

93年9月28日、美術館協力会

主催「美の探訪」B班37名はフランクフルト経由で、最初の訪問地スペインの首都マドリッドに降り立ちました。

翌日から専用のバスで市内見学、美術館巡りとなりましたが、9月末のマドリッドは初秋とはいえ穏やかな温かさで私達をその懐へ迎え入れてくれました。

この街の歴史は遙か9Cに遡り、かつて世界を制覇したスペイン帝国の栄光と衰退、記憶に新しいスペイン内戦、その幾多の歴史の葛藤の中で、生まれ、育まれてきた芸術文化が、現代に姿をとどめ息づいています。中世の面影を残す街並、重厚で壮大な石の建造物が、永々と木の文化を歩んできた私達に鮮烈な衝撃を与えます。

お目当てのプラド美術館をはじめ、ソフィア美術館、トレドまで足をのばしてエル・グレコ、サント・トメ教会等での珠玉の名品の数々、その膨大なコレクションを前に、今回同行し、解説をしてくださった寺嶋学芸員が、各所で「自分に好きな1点を見つけよう」とアドバイスしてください。ゴヤの「着衣のマハ」「裸のマハ」に心うばわれ、ピカソの「ゲルニカ」に戦争の不条理を憤る。

最も惹かれたのは、ソローリヤ美術館のホアキン・ソロリヤの作品。スペイン外光派の巨匠で、淡い色調、印象派を思わせる作風は、海岸に水浴する親子、波間に戯れる子供達の、何気ない仕草の描写に光をふりそそぎ、輝くばかりの美しさに昇華させていて魅了します。

こうして至福の時間は流れ、感動の日は続きます。

次の訪問地、ロンドンも温かで、ホテルの前に広がるハイドパークは、わずかに初秋の彩りを見せています。

英国もまた、時代の先鋭として伝統と歴史を調和させてきた国。その中で大英博物館は、人類の英知を結集し大

英帝国の繁栄と威信を象徴するかのようにその文化遺産を現代に伝えています。館内の広さと収集の数は想像を越え、パルテノン神殿の彫刻、ロゼッタ・ストーン等を目指したすら歩いた印象が強い。嬉しかったのは、若き日何度も読み返したC・ブランテの「ジェーン・エア」の初版本を見つけたこと。ジェーンになりきって小説の中のロchester氏に、熱い想いを抱いたことがあります。遠い日のこと。が、立ち止まる暇はありません。

また、モネ、ルノワールなどの印象派の作品が多いコートルド美術館は期待どおりで時間を忘れます。

テートギャラリーではピカソの作品の前で、20名程の児童が線描きされた絵に彩色している姿を目にしました。英國ではカリキュラムに組まれ、こうした造形・鑑賞教育が日常的に行われていると知って、文化を生み育み、受け継いでいく担い手が脈々とつながる未来をそこに見たような気がしました。

今回、訪れた国は2ヶ国。いづれも富裕な国であった時代の収集で、全世界、全時代、全ジャンルを網羅した美術品に触れることができました。

企画された方々、学芸員、団長さんはじめ、楽しくご一緒させていただいた皆様に感謝し、帰路は一行中の八木ご夫妻のご子息が操縦する飛行機でした。ご夫妻にとっては至福の時間。私達にもお福分をいただいたような旅の思い出を飾るにふさわしいフィナーレでした。

「美の探訪」はまさに感動とロマンに満ちた旅でした。



ESSAY

日本語の行方



藤井 勇吉

「ナガレイシですね」養蚕研究で初来道の韓国柳江善さんにさすが（流石）の漢字を言わされたものである。二年間だけという柳さんの学習した日本語は上手で、漢字力の確かさにも驚かされた。

同時に、己の漢字力や言葉遣いの劣れを気付かせてくれた。そんな時、ある学者の言葉が浮かんできた。「ラジオから流れる正しい日本語を話す若者の声に身を乗りだしたら、それは外國留学生だったので、がっかりした。」

最近、国内でも言葉の乱れが指摘されている。ら抜き、助詞なし、感嘆詞だけでは、行く末が気になつてくる。言語は人間の感情・思想を表現伝達するもの、又「文化」といわれるゆえんがある。もっと大切にしていきたいと思う。

然し、言語は時代の流れに影響され変化しているし、簡略されたもので意思の伝達が可能ならば、多少の事は仕方のない事か！

作品と心



阿部 節子

北京への旅



菅野 延枝

主人のテニス仲間に画家がおります。画風が物悲しく、冷たさえ感じて、あまり好きにはなれませんでした。知り合ってから二十年程経ちますが、四年前の個展から、今まで目にしたことのない、画面から溢れる輝きを感じる様になりました。点を基調とした独特的の画法は、主人といつも感心しております。先日の個展では、大小様々な力作が並び、幾重にも折り成す点の彩やかさに樂しさが加わって、一層の輝きを増した様に感じます。

同時に、作品を通して作者の悩みや、貫き通そつとする生き方を、伝えようとしていることが解る様な気がしてきました。こうして身近に接してみますと、絵を観ることへの樂しさが、自分の中でも増していくのを感じます。

古い北京の街が残り、そこで生活はホテルの華やかさとは別の世界のようでした。

紫禁城、明けの十三陵、万里の長城等の広さと豪華さは、想像を越えたものでした。故宮の朱、黄、緑、青、金色で彩られた建物は、中国の色彩の特色を代表しておりましたが、芭蕉の句碑に誠に言い得ていると心を動かされ、数百年の時のかなたへ思いを馳せる。こんな四人が土地の人ふれ、味覚を堪能し、夫と父は歴史ロマンと地酒に酔う。数えきれない程の、こんな旅が昨年父の他界と共に終った。でも新しい旅は温泉を中心

旅と私



田村 敦子

来館記念に好評の パウチしおり

昨年から美術展観覧者の来館記念にもらおうと、パウチしおり（入場券をパウチフィルムに挟み熱加工し、しおりとしたもの）の発売を開始しました。価格は1枚100円で小銭でお求めできご好評をいただいております。みなさんも記念にどーぞ。

なお、開催期間以外のパウチしおりも用意しておりますのでご来館の折りには是非ご覧いただければと思います。

北海道近代美術館の

新年度展覧会資料を配布

団体などの新年度計画の参考資料に供したいということから、近代美術館の平成6年度の展覧会年間計画（予定）情報を収集しチラシを作成しました。このチラシはPTAその他団体に配布し、事業計画検討の際美術展の観覧も加えていだくようお願いしておりますが、ご入用の場合は事務局までお申し出ください。

<パリの空に花>オープン

1月11日、北海道立近代美術館では多くの参会者を得て、シャガールの<パリの空に花>が華やかに公開されました。

これまで、近代美術館はバスキン、スーチン、キスリング、ユトリロ、ローランサンなどエコール・ド・パリの作家の作品の収集につとめ、その数は現在268点にのぼり収蔵作品全体の1割くらいになっております。しかし、その中にジャガールの油彩は含

まれなく、この収集については長年待望されていました。

シャガール後期の作品である<パリの空に花>は、来年度設けられた「北海道美術品取得基金」によって収蔵されることとなったものです。

近代美術館では、この作品に加えエコール・ド・パリの代表的作家10人の作品10点を4月10日まで特別展示していますので、どうぞご覧ください。



●ボランティア活動

「昨今美術館や博物館などからボランティア活動についての照会が随分多いねえ」

「住民要望の受け入れとか、活動の運営とか、総てに責任をもってやっているという当会は、全国的に注目されている」

「どこも、運営の軸となるセクションに苦慮しているというのが実感らしいね」

「組織が大きくなればなるほど、その課題も大きくなる。問題はそれに対処できるかどうかだよ」

●会員数は伸びているが

「微増とはいえ会員数が増加していることは嬉しいことだねえ」

「住民のみなさんには感謝しなければならないことだけ・・・」

「会の本来目的に賛同するという趣旨の理解が薄いということ？」

「会員証による観覧が目的の入会とみられるものが多いようだからねえ」

「建前と本音を織混ぜなければやっていけないといふことのかもね？？」

●組織改正

「組織改正の作業は大変だったねえ」

「われわれよりもボランティアの幹部の人たちが大変だったんじゃないかな」

「動あれば反動ありで、普段は意識していないことまで意識しだすからねえ」

「いずれにしても、大勢の人に理解してもらうということは大変な作業に違いない」

「木を見て森を見ずという言葉もあるが、狭い視野では駄目だということを自戒しなくてはならないということかな」

●会員証

「展覧会の観覧実績を見ると、同じ会員証番号が目につくことがあるねえ」

「感動して何回も観覧しにきたんじゃないの」

「そうかもしれないけど、5回も6回も見るかなあ」

「疑って悪いけど、そいつは会員証の転貸かもしれないね」

「転貸は出来ないことになっているんだけどねえ・・・」

大絵巻「道産子追憶之巻」が あなたの身近かで甦る

「もしもし」のたびに
北海道の追憶が・・・

テレホンカード

各1枚 1,000円



四季折々の追伸に
北海道の原風景を・・・

一筆箋

四季10枚組 1冊

1冊 300円



頁を開くたびに
北海道の新しい感動が甦る

パウチしおり

各1枚 100円



お求めやすい価格で好評発売中